

ラテンアメリカ文学を読む

辻邦生／鼓直／筒井康隆／山野浩一

天澤退二郎／増田義郎／牛島信明

吉田秀太郎／中村真一郎／木村栄一

富山太佳夫／桑名一博／山口昌男

内田吉彦／清水憲男／鈴木恵子

ラテンアメリカ文学叢書14 編集—鼓直

ラテンアメリカ文学を読む

著者——辻邦生／鼓直／筒井康隆／山野

浩一／天澤退二郎／増田義郎／

牛島信明／吉田秀太郎／中村真

一郎／木村栄一／富山太佳夫／

桑名一博／山口昌男／内田吉彦

清水憲男／鈴木恵子

定価——二八〇〇円

本書はセイユウ写真印刷株式会社明和印刷株式会社および大口製本印刷株式会社の三社の協力により一九八〇年五月二五日印刷製本され国書刊行会（佐藤今朝夫——東京都豊島区巢鴨三—五—一八電話〇三—九一七—八二八七振替東京五—六五二〇九）により一九八〇年五月三〇日その初版第一刷が刊行された。

ラテンアメリカ文学を読む

辻邦生／鼓直／筒井康隆／山野浩一

天澤退二郎／増田義郎／牛島信明

吉田秀太郎／中村真一郎／木村栄一

富山太佳夫／桑名一博／山口昌男

内田吉彦／清水憲男／鈴木恵子

ラテンアメリカ文学叢書

国書刊行会

定価二八〇〇円

ラテンアメリカ文学を読む

フテナメリカ文学を読む

辻邦生／鼓直／筒井康隆／山野浩一

天澤退二郎／増田義郎／牛島信明

吉田秀太郎／中村真一郎／木村栄一

富山太佳夫／桑名一博／山口昌男

内田吉彦／清水憲男／鈴木恵子

国書刊行会

本書は、

鼓直（法政大学）の編集による

ラテンアメリカ文学叢書の一冊（第十四巻）として
刊行された。

ある幻想空間への幻想……………辻邦生

——ラテン・アメリカ文学への讃歌より

私がラテン・アメリカ文学を読んだあと感じる一つの共通した映像は、薄暗く日除けをおろした書斎兼客間で、せつせと架空の百科辞典を書いている、口ひげをはやした、眉と眉のあいだに深い皺のある、初老の男の姿である。窓ガラスは埃りによごれていて、外を見るためにはごしごしこすらなければならないし、見えたとしても、三カ月前の革命で権力を握った独裁政権の支配するその都市の通りは、がらんとして、時々行進する警邏隊の姿が眼に入るぐらいのものである。男の妻は隣の地区の私立女学院の教師をして、とにかく革命政権下のインフレを何とかやりすごしている。腰のあたりが太くなり、全体に中年女の形が身体の外側に現われているけれど、若かった頃の燃えるような眼や、美しい横顔は今も変りない。たとえ人生の苦難に加えて、数え上げるには際限のない政治的苦悩が、形のいい額や眼のまわりに皺を刻んで、年齢以上に老けた印象を与えていたとしても……。

窓のそばの鳥籠には頭のうしろの毛の剥げた鸚鵡が、黒い鋭い爪のある脚で、小さなブリキの餌箱を手前へ引き倒そうとしている。そしてそれが結局うまくゆかないことがわかったと、不機嫌そうに頭をかしげ、机にかがみ込むようにし

て書きものをしてゐる主人のほうへ、なじるような眼を向けるのである。

口ひげの男の熱中する架空の百科辞典は、この男の頭のなかに生れた架空の古代王国に関する膨大な文明史的著述である。そこではまず、この百科辞典が紀元千五百年代にいかにして当地の学者たちによって編纂されたかの微細な考証と、学者たちの経歴、経歴のなかに挿入された学者の性格と学業を示すエピソードとが記される。ついで全一卷にまとまるについての討論、原稿の浄書・整理・分類の過程、幾山にも積み上げられた紙束の群に関する記述（たとえば紙束の紙質が何種類あつて、途中で極端にそれが悪化しているのは、旧大陸から定期的に航行していた交易船がこの時期勢力を得たカリブ海域の海賊たちのため、しばしば欠航を余儀なくさせられた結果である云々という如き歴史的考証）がつづく。その第一部にもあたる論述が終ると、第二部では、当の百科辞典の形態、装幀、本文紙質、活字の鑄造具合、その特異な形状、それとの関連において記述される当時の印刷術、印刷所の様子、印刷工の生活（とくに印刷所経営者の数奇な半生には単独の物語として語られるだけの豊富な内容があり、われわれの常識でも中篇小説と見なしうる紙数がさかれている）、さらに百科辞典が出版されて以来、最初の購入者から図書館に寄贈され、火災で危うく消失するところを、隣に並んでいた表紙に宝石を嵌入した福音書写本とともに運び出されてニューヨークの古書競売に送られ、一度は旧大陸の蔵書家のあいだを転々と遍歴したのち、船荷の積み間違えから当地に舞い戻り、倉庫でながいこと放置されていたのを、酒好きの倉庫番の老人の手で骨董屋に売られ、やがてそれが当市の市立図書館におさめられるまでの詳細な経緯等々が、いつ果てるともなく記されているのである。

しかしわれわれは当の百科辞典にまつわる膨大な記録や考証にまだ驚いてはならないのであつて、この口ひげの男は、不機嫌な鸚鵡の眼ざしの下で、いまやせつせと、架空の古代王国の文明の実態に関する、気の遠くなるような精緻な記述に没頭しているところなのだ。文字どおりこの百科辞典は、実在の百科辞典とそっくり同じ形に（むしろそれが実在すれば、の話であることは、それが架空の百科辞典であることを知っているわれわれには十分わかつてゐるのであるが）Aの項からZの項まで再現されてゆくのである。

したがってそこにわれわれはこの古代王国における統治形態や、王家の人々の歴代記（王朝は幸いにして七代で滅びたが、王朝創始者フアンの現実とも夢想ともつかない物語だけで、すでに一卷の分量の原稿ができあがっており、とくに彼の左手が毒蛇であって、彼が睡眠中も目覚めていて、数次にわたる暗殺者がフアンの寢所を狙っても、誰一人としてその目的を遂げられなかったのは、この毒蛇に噛殺されたためであるという章については、この毒蛇の由来に関する考証がえんえんとつづいているのである）、王冠の形態、王笏の由来、歴代王家の婚姻（それがどのように詳細に語られているか、ここでは述べないが、とにかく王朝が七代で滅びたのでなければ、この口ひげの男ははたしてその項目全体を書くことができたのだろうか、と、われわれはその細字の並ぶ記録を溜息まじりに眺めるのである）、その儀典書、儀式の種類、宮廷の位階、服装、王宮の構成、各居室の構成と内部裝飾、王宮の置かれた都市の景観等々に関する記述をつぎつぎと見てゆくのであるが、それは単に、政治、経済に関する制度的記述だけではなく、そうした現実の上部に築かれた王国の頭腦的部分、すなわち造型芸術はむろんのこと、古代王国の衰退後も当地方の原住民のあいだに残っている古代楽器による音楽演奏の実際、その古代との影響関係、文学、演劇、祝祭、舞踏等を含んでいるのである。

しかしわれわれにとつてとくに興味深いのは、この古代王国に生活する庶民の、無数の生活形態についての果しない観察と記録である。それらはAからZまでのあいだに、限度を越えた過剰な情報の量塊となつて、茶色になつた（一部分は問題の図書館の火事で焦げた痕跡をもつ）頁から、外へ溢れようとしている。たとえば古代王国の性愛に関する部分の詳細な記述にいたつては、ただ驚嘆のほかなく、かかる年代において（おそらくバビロニアの繁栄以後ということはあるまい）人間がかくも生殖以外の目的のために、男女の肉体という存在を、いかに官能の楽器として洗練することに熟達し得たか、という事実を知るためには、そこに詳記された各種娯楽の調査（性別、年齢別、職業別——とくに知識階級に属する人々に対する特別な調剤法がある——、体格別に考案された薬草、薬虫の種類、採取法、乾燥法、調査法）や、カジュラホの仏塔寺の壁面を埋めるアクロバットの体位が愛戯のごく初歩的段階を刻みだしたのだと納得させる玄妙無限な交合法の記録や、想像を絶する性愛具の種類の報告を見るだけで十分なのである。

しかし不機嫌な鸚鵡の眼ざしの下で書きつづける口ひげの男において、われわれがさらに驚くのは、この男が、架空の古代王国の一本一草にいたるまで書き落すまいとする情熱であり、そのために彼は、どんな家具の細部、どんな壁の割れ目のぎざぎざも見逃すまいと、鋭い注意深い視線を、内部の虚空へ——もちろんそこへ古代王国がまざまざと浮び上っているわけだが——投げかけていることである。

物が存在することにこれほど取り憑かれた男をわれわれは見たことがない。まるで、生れてこのかた闇一色の牢獄のなかで暮らしていた人間が、不意に、この世を眼にしたとき感じるような、物の存在への陶醉が、その走りゆくペンの下から溢れ出ていると言ったらよからうか。

やがて男は額にうっすらと滲む汗を手の甲で拭くと、机の前から立ち上り、書斎兼客間をゆっくり行ったり来たりしながらつぶやきはじめる。

「結局、すべての秘密は架空である、ということのなかにあるのだ。おれはこの四十年、貧困と饑餓と汚辱と裏切りのなかで生きてきた。子供の頃から見たものは売春、革命、汚職、殺人、強姦、窃盗、密通、戦争、独裁、不正だけだった。おれは裏町のすえた臭気や、汚水にうつる女たちの下着しか知らなかった。それから旧大陸に出かけ、大学で学び、いつか公職を経験する人間になっていたのだ。おれの身体の内には貧困から栄光まで、旧大陸から南米大陸まで、人生のあらゆる情景、人間のあらゆる諧調が充滿しているのだ。おれは何度かそれらを吐きつくそうと試みた。レアリスムもシュレアリスムも幻想形式もアフォーリスムも劇形式もおれは手当り次第使ってみた。だが、おれはながいこと、この内部に充滿するものを、何か爆発的な感覚として、自分の外へ吐きだすという経験は得られなかった。おれの書くものに対して好意ある意見を述べてくれる人はいた。だが、おれには、それは嬉しくなかった。爆発的に内部からすべてが流れ出すこと——それだけがおれの願望だったからだ」

男はしばらく窓の前に立って、暑い夕日の照らす人気がない通りを眺めた。

「ところが、ある日、その爆発がやってきたのだ。それは、おれが、おれの属する社会・歴史・文明の全体を持ちつづ

け持ちつづけして、揚句の果てにその向う側に出たことを意味したのだ。それまでおれは歴史のなかにいて、歴史の枠のなかで、どこへ方向を求めるべきか模索していた。おれの上に苦悩のしかかり、おれはそのため化石のようになって暮さざるを得なかった。だが、その化石の期間、おれは、石になってなお生きていたのだ。なぜなら、化石の一億年が経過したとき、おれはついに歴史を越え、歴史自体を振り返る存在になっていったからだ。おれが歴史に囲まれていたとき、おれのまわりには事実が渦を巻き、おれの見るところのものは、たとえいかに眼を見開いても、その全体の限られた一部にすぎなかったのである。しかし歴史を越えた存在となつて自分のまわりを見まわすと、あるのはただ虚無だけだ。それはあるいは時の進行を越えたもの——永遠と呼んでもいいものだったかもしれぬ。ともあれ、おれはこの永遠の無のなかに立つて、はじめて自分のなかに充滿するすべてが、一挙に、その全的な形において噴出してゆくを感じたのだ。それは爆発的瞬間だった。そのときおれは、この虚無のなかに、このおれの全体を、全的形において、存在せしめようと、身体を前へ構えている自分を感じた。おれのなかにあるものは、どれ一つとして、詳細に書いて、書きすぎるといふことはなかった。なぜなら「書く」ことによつてのみ、このものは詳細な形として存在することができたからである。おれはもはや歴史の枠のなかで進行する時間などというものにかかわることができなかった。一億年を化石となつた人間にとつて日常的時間の前・後というのは、どういう意味を持つだろう。おれは過去と現在が、現在と未来が、未来と過去が、つねに一つの「時」の相の現われとして実感できるのである。だが、それにしても、この「存在」を在らしめるために駆使される言葉というものは、何という玄妙な魔法であらうか。一切はこの言葉であり、言葉によつて生命が生みだされるのだ。ああ、言葉による爆発を可能にした永遠の無という魔術よ。これこそがわが新しい文学に奔放な想像力をもたらしたただ一つの秘密なのだ。おれの架空の百科辞典よ。さらば一億年の孤独に耐えよ」

口ひげの男はそうつぶやくと、やがて不機嫌な鸚鵡の鳥籠をはずし、身のまわりのものをトランクに入れると、自分の百科辞典の *casa* の項目のなかへさっさと入ってしまふのだ。そしてあとには埃りに曇つた窓ガラスと殺風景な書斎兼客間が残されるが、それもつかの間で、いつか吹きはじめたこの都市特有の熱い乾いた風に、砂でできた建物

のように、吹かれ、崩れ、風化し、消えてゆく……。

こうしてただひとりカルペンティエールとともに、ガルシア＝マルケスとともに、ボルヘスとともに、コルタサルとともに、アストウリアスとともに、深夜、私は書斎（狭苦しい私の書斎である）に取り残されて、ひたすら、魔術の力としての〈無〉にあらためて震撼させられる、というわけなのである。

最近のラテン・アメリカ小説

……………鼓直

最近たまたま読んだツヴェタン・トドロフの小論「コルテスとモクテスマ」は副題が「コミュニケーションについて」とあって、その主旨は、スペイン側の総大将エルナン・コルテスのメキシコ征服が一方的に成就した原因の一つは、後に彼とのあいだに一子をもうけたかの愛妾マリンチェを初めとする有能な通辞や諜者を多く用いて、彼らを通じて得られた情報を有効に利用したことにある。それに対してメキシコ側の皇帝モクテスマは、同じような役柄を勤める者たちが折角もたらした情報よりもむしろ、神々がさまざまな啓示、予兆のかたちで示した託宣をもっぱら重んじ、未曾有の危機における行動の一切の基準をそれに求めることによって、みずから墓穴を掘ることになった。換言すれば、コルテスは人間のあいだで普遍的、合理的に認め合った言語によるコミュニケーションを新大陸の現実把握のための手段として用い、モクテスマはその集団が深く尊崇する偶像、神々から与えられる曖昧で多義的なコミュニケーションに、不安定な己れの未来を賭けたというわけであった。両者の戦いの帰趨はおのずから明らかであり、メキシコの地は圧倒的に少数のスペイン兵の足下に屈服せざるを得ない結果となった。

トドロフのこの主張によれば、結局のところ、われわれの関心を目下のところ強く惹いて止まないラテン・アメリカの文学——ブラジル、ハイチ、そしてその他の狭い地域を除き、逆にアメリカの自治州プエルトリコを含めた文学——が、ヨーロッパでも由緒ある言語の一つたるスペイン語によって書かれ続けるという宿命は、あのコルテスとモクテスマの両者がそれぞれ抱いていた、相互に埋めがたい断絶として持っていた、人間的な言語の機能の根元的なものに対する二様の認識のうち、その一方の決定的な優越、有効性の実現から始まったことになる。

スペイン語は征服から植民の過程において、メキシコの諸言語だけではなく、時代はかなり遅れるが、遙かなアルゼンチンに至る広大な地域に住んでいた原住民の民たるインディオの言語のほとんどを放逐し抹殺して、宗主国から移された唯一の公用語として、したがってまた唯一の文学用語として、独立後のラテン・アメリカにおいてさえ君臨し続けてきた——ペルーにおけるケチュア語の公用語としての認知という最近の出来事は別として——が、ラテン・アメリカにおけるスペイン語の辿ったこの運命に関連して興味深いのは、次のような出来事である。すなわち、昨年（一九八〇年）の八月、大西洋上のグラン・カナリア島のラス・パルマス市で第一回国際作家会議が開催され、その閉会式がマドリードのイベロアメリカ協力センターという場所で行なわれたが、その際、病氣を理由とする代読のかたちながら、スペイン王立アカデミーの会長を永年勤める高名な碩学、ダマソ・アロンソは「スペイン語というこの宝物を保護する必要性」を論じて言った、「この言語の保護には、スペイン、プエルトリコを含めて二十カ国の言語的手段であるという障害が横たわっている。十九世紀においては、われわれスペイン人がこの言語の「主人」であった。今日では、そうではない。われわれの言語の主人であるのは、そのスペイン語を話す何億という大衆なのである。今やわれわれすべてが共に主人となったのだ」（傍点筆者）。

シニクな見方をすれば、この発言もイベロアメリカ協力センターという場所を考えただでのジェスチュアと取れない。しかし、ロルカと同世代の生真面目なあの学匠詩人が、十九世紀の末葉にニカラグアの象徴詩人、ルベン・ダリオの主導した近代主義の詩の隆盛以来、そしてとりわけ、今世紀も半ばに入ってから（一九四〇年）のイベロアメリカもしくはラ

テン・アメリカ全体を蔽う〈新しい小説〉のめざましい活況の到来以後、旧世界と新世界のスペイン語圏の文学の秤がどうやら後者に傾きつつある事実を意識せずに、あのような発言を行なったとは到底思えないのである。コルテスによって一方的に押しつけられた唯一の宗主国の言語、スペイン語は今や、彼とモクテスマの子孫たちの属する国々のすべてが、それぞれ宗主国としての身分で相互にコミュニケーションし、自己表現をそれによって行ない得る人間的、普遍的言語となった、という喜びをこめた認識が、ダマソ・アロンソの言葉の背後に間違いなく存在している。

余談めいたものが長くなったが、八〇年代に入ってから、戦後とは言わないまでも、六〇年代の初めからラテン・アメリカ小説が驚嘆すべき達成のかずかずを各地域で示し始めてから、早くも二十年の歳月が過ぎ去った。回顧の対象として二十年という月日は決して短いものではないだろう（文芸の分野でその時々ではやりの衣裳がめまぐるしく変化し交替している、今日のような時代ではなおさらである）。その間に輩出した多くの才能豊かな作家たちの資質を見きわめ、彼らの物した作品の傾向を誤りなく押さえた上で、適切な見取り図を提供するのは困難な作業である。困難なことだと知りながら以下それを試みようというわけだが、その前に、いわば先史的な、三〇年代までのラテン・アメリカ小説文学の状況に触れておくのが順当というものだろう。

まずメキシコに眼を据えようと、ここでは、五九年のカストロ革命が成功するまではラテン・アメリカにおける最大の政治的事件であった一九一〇年の革命の前後、それに素材を求めたルポルタージュ的な革命小説や農民小説が簇生した。またアンデス地域では、被圧迫者の地位に留まり続けた種族の悲惨な姿を描くインディオ小説が多く書かれた。さらに密林や大河、平原などの圧倒的な大自然が暴威を振る地方、ベネズエラやコロンビアでは自然主義的な小説が生まれた。繁雑になるのでその代表的な作物の表題は省略するけれども、それらは一切、十九世紀流の伝統的なアリズムの手法を少しも疑うことなく墨守するものだった。新世界に独自の、或いは特異な問題を掘り起こしたという功績だけは見逃せないが。

そしてそのような伝統的なアリズム文学が凄まじい勢威を誇っていた時代、一方で、些かなものながらそれに対抗

する反リアリズムの胎動が、広大な大陸のこここで始まっていた。すでに十指に余る作品——共作を含めて——が紹介済みなので多言を弄する必要はないが、ヨーロッパで表現主義その他の前衛運動を経験して帰国した頃から十年余を経たホルヘ・ルイス・ボルヘス（アルゼンチン・一八九九年）の『伝奇集』、『アレフ』といった形而上学的なエッセー風の短篇や、ボルヘスの小説理論を見事に実現した僚友、アドルフ・オ・ビオイ・カサレス（アルゼンチン・一九二四年）の巧緻きわまりない『モレルの発明』、『脱獄計画』といった中篇を初めてとして、レオポルド・マレチャル（アルゼンチン・一九〇〇—七〇年）の『アダン・ブエノスアイレス』や、フアン・カルロス・オネッティ（ウルグアイ・一九〇九年）の『穴』、その他が陽の目を見たのである。少なくとも四、五〇年代の文学史、小説概論では上記の作者や作品は軽侮的な扱い、或いは完全な黙殺に近い遇せられ方をしていたけれども、彼らの出現こそは、六〇年代以降のラテン・アメリカ小説の逞しい活力、驚くべき多彩さを準備したものであることを疑い得ないのだ。

ところで、六〇年代のラテン・アメリカ小説が俄かに活況を呈したについては、上述のような胚胎の時期の他に、その年代に特殊なさまざまな状況というものを考慮しなければならないだろう。ウルグアイの批評家、エミル・ロドリゲス・モネガルの『ラテン・アメリカ小説の（ブーム）』という小著がその点を考えるのに便利な手引きとなるが、彼によれば、〈ブーム〉が爆発的とも言うべきかたちで始まったのには、以下のような種々の理由があるという。第二次大戦後における都市化と中産階級のかつて見ない増加。大学を中心とする読者層の想像しなかった肥大。フアン・ラモン・ヒメネス、レオン・フェリペ、ラファエル・アルベルティ等々のスペイン知識人、文学者の内戦に動機を持った避難。ラテン・アメリカという広大な出版市場を内戦後に回復したいと願う出版社の進出と角逐——最も大きな成功を収めたのが、バルセロナの進取的なセイクス・バラル社であることは周知のとおりである。そして特に、五九年にバティスタを倒して政権を奪取したカストロのキューバ革命の刺激。少なくとも初期の文芸政策として、革命に対立するもの以外はすべてが可である、という寛容な態度を打ち出したカストロ政権の下で、革命前から名の聞こえたアレッホ・カルペンティエール（一九二四年）やホセ・レサマ・リマ（一九二一—七六年）を責任者に据えた国立出版局は、スペインの古